

[Book Together 読書する大韓民国]

朴元淳(パク・ウォンスン)ソウル市長、デジログ時代の若者に推薦
『霧津紀行』、『ロボット時代、人間の仕事』 「読書新聞」2017. 8. 3

朴元淳ソウル市長が「読書する大韓民国」キャンペーンのために一肌脱いだ。市政運営に忙しい身でありながらも読書新聞の求めに応じて「全国民読書キャンペーン 読書する大韓民国」のためにころよく2冊の本を推薦してくれた。

多読家にして愛書家の朴市長がデジタルとアナログの混在するデジログ時代を生きる若者のために選んだ本には、人間に対する尊重、配慮、共同体精神がふんだんに盛り込まれており、日ごろの朴市長の考えがじゅうぶんに伝わってくる。

朴市長が推薦した本は『霧津紀行』、『ロボット時代、人間の仕事』。「霧津紀行」は韓国短編小説の傑作であり、作家の洞察力は感嘆に値すると評している。特に同書は先日民音社から地域書店向けに限定して文庫版が刊行され、地域書店振興の一助になるはずだという。また、『ロボット時代、人間の仕事』は人工知能の時代に「私」とは何者かについて省察するきっかけになる本だと述べている。

朴元淳ソウル市長が推薦する本とその推薦理由



金承鉦(キム・スンオク)の「霧津紀行」は韓国短編文学の傑作でしょう。いつ読んでも作家の繊細かつ清冽な名文に感嘆させられる作品です。金承鉦の小説の多くがそんな作品です。「ソウル 1964 年冬」、「力士」、「お茶でも一杯」、どれをとってもある個人の内面に起きる複雑にして微妙な心理をとことん掘り下げた洞察と筆力には舌を巻きます。

すでに多くの人に読まれている金承鉦の本をあらためて推薦する理由は、このたび特別文庫版が出版されたからです。民音社から出版されたこの文庫版は、表紙デザインもとてもセンスがいいので一目で手に取りたくなりますが、何といてもこの文庫版は全国の地域書店 130 店でしか出会えないことがいちばんのこだわりポイントです。ネット書店や大型書店では販売していないので、この本を手に入れるには、自分の暮らす町にどんな書店があるのか調べてわざわざそこに出向かなければなりません。

町の本屋さんが経営難などで店を閉め、その空白を大型書店が埋めるということが繰り返されている昨今、町の本屋さんへの関心を高め、町の本屋さんに足を運ぶきっかけと理由とを提供するという点で、今回の『霧津紀行』特別文庫版はすばらしい企画に違いありません。

もちろん、全国に約 2,000 店以上もある町の本屋さんのうち 130 店にしか置かれられないというのは残念です。諸般のシステム上の限界にぶつかった結果なのだろうと理解します。今後解決すべき宿題が何なのか確認を迫られる部分でもあるでしょう。にもかかわらず、この町の本屋さん向けの文庫版の出版が、メジャー出版社のマーケティング以上の意味を有していることは確かでしょう。

現在、ソウル市が取り組んでいる地域書店の全数調査、ソウルブックストリート事業、町の本屋さん週間の導入などとともに、出版社と地域書店のこうした努力が今後も続いていくなれば、いずれ人間と知識の交流する空間としての町の本屋さんがあらゆる裏通りに毛細血管のごとくよみがえるのではないのでしょうか。これを機に多くの方々が金承鉦の傑作を再読し、これまで知らなかった町の本屋さんにも足を運んでもらえたらいいですね。